

「お前^{めア}だちにギツチビシツカど語^{かた}つておぐ。

① ちようと我等^{おら}の御先祖^{ミソト}のヤコブさまア寂^{さび}しいベテルの山道^{やまみち}で仮寝^{かりね}の夢に見だように、

天^{あめ}が開^{ひら}いで、神さまのみ使い達^{だいが}が《人の子》たるこの俺^{おれ}の頭^{こうべ}の上で上^あつたり下^{くだ}りだりするのオ、やがてお前^{めア}達はその眼^{まなこ}で見るんだ！」^ケ

● 第二章

六・カナの婚礼

1 火曜日の日^ひだったか、ガリラヤのカナで婚礼^{こんり}の披露宴^{ひろうい}があった。イエシュさまの母御前^{ははごぜ}もそこにいたさった。

そもそもユダヤの法では婚礼の日取りは処女は水曜日、寡婦^{やもめ}は木曜日と定められていた。それは地方裁判所が月曜日と木曜日に開かれるからで、このようにすれば新妻の処女性についての異議を新郎が翌朝訴え出ることができからであつた。しかるにこれとさらにこの法を無視して火曜日に婚礼を挙行したのは、そもそもガリラヤ衆には、偉そうに人を見下す都^{みやこ}のお歴々^{れきき}のお達しに敢^あえて逆らうことをよしと心得る反骨の風があつたからである。また、尊^{たつと}き書き物の《始まりの書^{ふみ}》に神さまが天地万物をお造りになつた時、そのお造りになつたものを御覧^{ごらん}になつて「よしとされた」のであるが、② 三日目すなわち火曜日には二度も「よしとされた」とある。ゆえにこの日は最もめでたい日だとされてもいたのだ。

2 さて、イエシュさまとその弟子たちもその

宴うたげに呼よばれた。

何しろ、貧しい人々のお布施を頼りに空き腹を抱かかえてさすらい歩いている旅の説教師たちである。もともと「①大飯食らいの大酒飲み」などという渾名あだなさえ貰もらっている師匠とその弟子たちだ。このガツガツした一行が大いに食くい、かつ飲んだものだから、

3 とうとう酒が尽きてしまった。そこで、

おなご
女子座敷にいた

ははごぜ
母御前か

見るに見かねて、普通は女の来ることのない男座敷まで、わざわざ境を越えてやって来て、いい御機嫌ごきげんで酔っぱらっていた

イエシューさまにこう言いった。

「酒さけかなアごアすよ（ないですよ）！」^⑦

4 イエシューさまは言いいなさなった。

「これはこれは御夫人！ やつがれにもお前さまにも何の関わりがありましようかい？ やつがれの出番はまだまだまだでござりまするぞ。」

5 母御前ははごぜは宴うたげの手伝い人たちに言いった。

「我家わがやの倅せがれが其方等そなたどもに何なにが言いったら、如何いかななんな事ことでもその通りにしらつせんや（しなされや）。」^⑧

6 そこには、ユダヤ人ユダヤ人らが身を清めるために使う石の水瓶みずがめが六つああった。それぞれ四斗から六斗ぐらい入る瓶かめだなった。

7 イエシューさまはその手伝い人たちに言いいなさなった。

「この六つの瓶かめに水みずを張みりなれ（張りなされ）。」^⑨

それで、手伝い人たちはその瓶に口くちきり水みを張みつた。

8 イエシューさまは言いいなさなった。

「今いますぐこれこれを汲くみんで、宴うたげの世話役せわやどの所どへ持もつて行いく。」

ぎなれ（持って行きなされ）。」ケ

そこで、その人たちはそれを汲んで、持って行つた。

⁹ 世話役は酒になった水を味見した。水汲みをした手伝い人たちは承知していたけれども、世話役はその酒がどこから来たのか、何も知っていなかった。それで、花婿を呼んで、¹⁰ こう言つた。

「バババ、誰でも初めにまず美味^{うめ}ア酒^{さけ}を出しておいで、客^{きやく}ア酔^よつた頃に味の落ちるのを出すものでござすが、其方^{そなた}は今まで美味^{うめ}アほうの酒^{さけ}をしまつておいでたのでござすか？」ケ

「イエシユーさまはこれからすることになるさまざまなすばらしい《印》の手始めにガリラヤのカナでこのことをなさつて、大いに面目^{めんぼく}を施^{ほどこ}しなすつた。それで弟子たちは、このイエシユーさまというのは大したお方^{かた}だと、本気でそう思つた。

¹² この後イエシユーさまは、母御前^{ははごぜ}と弟たちと弟子たちとともにカファルナウムに下がつて行つて、しばらくそこにいなさつた。

七・お宮から商人^{あきんど}を追ひ出す

参照 マタイ 21 12、13、マルコ 11 15、17、ルカ 19 45

46

¹³ ユダヤ人^{びと}の祝^いつ過ぎ越しの祭りが近くなつて、イエシユーさまはヒエロソリユマに上りなすつた。

¹⁴ お宮^{けいたい}の境内を眺めれば、神さまに生贄^{いけにえ}に捧^{ささ}げる牛^{ぎう}だの羊^{やう}だの鳩^{きう}などを売る者^{もの}らと両替屋^{りやうかひや}らが座を占めて

いて、心を静めて神さまのお声に耳を澄^すますどころか、売り声に声をからし、喧騒^{けんそう}を極めて

いるのが目に止まつた。¹⁵ それを見たイエシユーさまは、

大いに腹を立て、そのあたりに落ちていた

カナの婚宴

(ヨハネ福音書二章一一二節)

私たちはきょう、オタタヴィオがラ・シグエーニア島から私たちのために持って来てくれた、米と豆とそれからちよつとした果実入りのパンで共に、昼食を摂った後に、集會場で福音書を読んだ。

婚礼のぶどう酒がつきたので、イエスの母はイエスに言った。「もう、あの人たちには、ぶどう酒がありません」。イエスがマリアに答えられた。「私の為すことが、あなたに何の關係があるのですか？ 私の時はまだ来ていません」。しかし、イエスの母は下男たちに言った。「あの人言うとおりにしなさい」。

私は言った。——イエスの言葉「あなたに何の關係があるのですか」というのは、かなりきつい表現だが、これは聖書では他の箇所でもつねに争いごとと関連して出て来るんだね。今日では私たちは大体、「放っておいてくれ」とか「關係ないよ」とか言っているんじゃないだろうか。

これに関連する註釈を聞くために私は緊張していた。長い沈黙の後にオリヴィアが口を開いた。

——イエスさまの時がまだ来ていないというのは、彼の死の時ということね。彼はまだ奇蹟を行って
もならなかったし、ご自身を人々に、人間を解放する救世主であることを教えてもならなかった。な
ぜなら、そうしなければ、権力者たちがイエスさまを殺してしまっただろうから。だから、イエスさ
まは仰せられたのよ。「放っておいて下さい。私の時はまだ来ていません」とね。

皆は、この説明を案にもつともなことだと思ったように見えた。それから長い休止があった。

するとマルセリーノが話し出した。——オリヴィアが言ったことに従うとすると、マリアの態度
は本来、非常によいひとつのお手本だと言えるね。イエスは不安だったのかも知れない。人間が死を
不安に思うことは、もちろん、自然なことだ。後に彼の時が来たとき、イエスはゲツセマネの園でも
不安に襲われている。しかし彼はただ、単に用心していたのかも知れないが、これは基本的には同じ
ことだ。しかし、この場でのマリアはいずれにせよ、なんの不安もないように見える。彼女は用心す
ることなどは考えず、奇蹟を行うように、自分の息子を勇気づけているんだ。イエスはまだまだご自
分の使命に突進しようとは思われなかったが、マリアがイエスを踏み切らせたんだ。マリアはあたか
もこう言ったような気がする。「何が起ころうと、まったく構わないわ」。そして彼女は雇い人と呼ん
だんだ。

アレファンドロ　こんなふうに革命的な母親たちは、革命的な息子たちを勇気づけるんだ。その行
動を思い止まらせる代わりに、「お気をつけよ」と言ったりする代わりに、彼女たちは息子たちが自
分の使命を果たすように鼓舞するんだ。

ウィリアム 私は、カミロ・トレスの母親が彼女の息子について語っている物語を思い出した。トレスが政治に関わりを持ち始めた時に、この母子は極く自然に、来たるべきことについて語り合っているんだ。「お母さん、彼奴らが僕を殺したら……」と彼は言った。すると彼の母親は「息子よ、あの人たちがあなたを殺したら……」と言うんだね。イエスはここで簡単に自分の母に、自分が困難なことに会おうだろう、と言っているんだ。それが、彼ら母子がふたりとも、実に静かに受け入れた事実なんだね。

カルロス・アルベルト イエスとマリアを招待したのはよい友人で、困窮した状態にあったんだ。イエスには奇蹟を行うより他に、どのような方法も残されていなかった。そしてイエスはこの奇蹟によって、彼の公的な生活、つまり彼の闘いを始めるんだ。そうしてまたすぐに迫害が始まる。ヨハネはこの章のすぐ後に、イエスがどのようにして、神殿から商人たちを追ひ払い、その後すぐにご自分の死について語ったかを記している。だから、イエスはこの最初の奇蹟のうちに、あの事件に向かって駆け抜けて行ったことが解る。

カルロス・アルベルトの妻であるマリア・ヴィットリア。——マリアさまが基本的には、ご自分の息子に同意していらしたのが解ります。なぜなら、彼女はイエスさまに答える代わりに、ほんとに何気なく使用人たちを呼ばれて、イエスさまが彼らにぶどう酒を与えるようになさっていらっしやるもの。

マヌエル イエスが何か重大なことをする代わりに、人々にぶどう酒を与えることによって、初め

てひとつの祭りに参化しているというのは、あまりいいことじゃないのかな？

アンジェル イエスはきつと、ぶどう酒はよいものであるということ、お祭りを祝うことは素晴らしいことだということを僕たちに示すために、こうなさったのさ。イエスはナザレン派のプロテスタントたちのように、酒を飲んだり、煙草を吸ったり、踊ったり歌ったりすることが罪だなんて、お考えにならなかったことが解るじゃないか。

イエズス・シャヴァリア（シュシュエ）。彼はマサヤで勉強していて、このとき一週間、私たちの許に滞在していた。——だけど、イエスは恐らくまた、将来、彼が聖餐式の時に、ぶどう酒を血に変えるために、この奇蹟を起こしたのかも知れない。

そこにはしかし、ユダヤ人のきよめのために準備されている石がめが六つあった。それぞれのかめには、およそ八十リットルから百リットルの水が入ることになっていた。イエスは下男たちに「その石がめに水をいっぱいになさい」と仰せられた。

パブロ・ウルタド こうしてイエスは、彼がきよめの儀式を尊重しておいでにならないことを示された。このきよめの水がぶどう酒に変わったことは、律法的なユダヤの掟が愛の掟に変わったことの比喩でもあるんだ。イエスがきよめの水をすべてぶどう酒に変えてしまったら、彼らはどうやって、きよめの儀式をとり行うことができただろうか？ きつとイエスは、何人かの人に尋ねられただろう。

「先生、今、私はどうして身をきよめたらよろしいのでしょうか？」するとイエスは「来なさい。そしてこのぶどう酒を、私たちと一緒に飲みなさい」と答えただろう。

ドン・フリオ 僕はここをこう考えているんだが。このかめには非常にたくさん水が入ることになっていた。つまり、彼らはそれだけ非常に多く、身をきよめたということだ。彼らにはその儀式においても過度のものがあつた。そして今度はイエスが逆に行き過ぎたんだ。彼は彼らに非常に多くのぶどう酒を与えた。

パブロ 溜息が出るほどの羨ましい量だ。この人たちがこれを飲んでしまったなんて……

私は言った。——ぶどう酒も飲まないし、断食をよくする人たちも多く居たんだよ。たとえば、エッセネ派の人たちだが……。洗礼者ヨハネの弟子たちとか……。ラ・カロリーナ島のナザレン教会に通っている、私たちのプロテストタントの同胞のように信仰に厳しい人たちが。そんな人たちはきっと、イエスがこんな世俗的な奇蹟を行ったことに、驚いただろうね。

宴会係の長は、ぶどう酒になったその水を味わってみた。彼はそれがどこから来たかを知らなかったが、水を汲んで来た下男たちだけは知っていた。

オスカル 僕は、ぶどう酒というのは、喜びや祝祭や楽しいことを意味すると思うんだ。また、愛をもね。イエスは、彼が喜び、大きな祝祭をもたらしただけのことを、僕たちに知らせたいと思われたん

だ。

オリヴィア そう、喜びね。そして、共同性もね。ぶどう酒ってのは、人々をお互いに親しくさせるわ。イエスは人間たちに同胞性というものをもたらしたのよ。だけど、人間たちを争わせたり、口論や刃傷沙汰をひき起こすぶどう酒だってあるわね。

アンジェル 金持たちが彼らの利己的な祝いごとの時に飲むぶどう酒は、僕たちを団結させたりはしないよ。そこには同胞愛なんてないからね。——少なくとも、そのお祭り騒ぎから閉め出されている貧しい人たちにとっては……

私は言った。——旧約聖書には、救世主の時代には、しばしば、ぶどう酒の大変な供給過多が支配する時代だろうと述べられている。預言者アモスは、救世主が現われたら、豊かなぶどうの実り、麦の収穫があるだろう、山々にはぶどう酒の雫がしたたるだろう、と言っている。イザヤは、神はこのとき、すべての民に上等な肉と非常によいぶどう酒のある、偉大な宴会を整えられるだろう、と言っているんだね。同じように彼は、救世主を悲し気な男ではないと告知しているんだ。この奇蹟によって、キリストはだから、彼が前もって告知されていた救世主であることを示したことになる。

マルセリーノ それで俺たちは、キリストが平等と同胞愛を人間たちにもたらした、ということが解るんだね。それがこのぶどう酒の実在のなかにあるんだ。同胞愛がなければ、喜びもない。人々を分け隔て、すべての人がともにできないお祭りは、喜びのない祭りなんだ。誕生日や洗礼日の祝日は、あちこちのグループの間に不一致が横行している時には、喜ばしい祭りではない……

——また、人々が刃傷沙汰を始めたりしたら——とオスカールの妻である、アンドレアが言った。マルセリーノが後を続けた。——そしたら、分裂した人々の集まり、それぞれに違った社会階級を持つ集団は、本当の宴会を共にすることも、お互いに本当の祭りを祝うこともできないだろう。ウィリアム 祭りは私たちが待ち望んでいるこの新しい社会、神の御国なんだろうな。だからイエスは、最後の晩餐で弟子たちと別れるときに、神の御国が来るまでは、もう今後、ぶどう酒を飲むことはないだろう、と言ったんだ。

カルロス・アルベルト イエスはまた、彼の教えについて、新しいぶどう酒について説くように語っている。新しいぶどう酒は古い革袋を破ってしまうだろうと……

フェリペ 僕は、イエスはぶどう酒を飲むのを好んでおられたと思うんだ。救世主としての最初の奇蹟を、彼はぶどう酒によって行っただから。また聖餐式にだって、ぶどう酒を用いている。罪人と共に飲むことで、イエスは責められている。イエスは言っておられる。新しい御国では、彼は僕たちと一緒に酔うだろう（あるいは僕たちと共に飲むだろう）と。（それは実際には同じことだけれど）。しかし、イエスはたったひとつのことは望まなかった。人類の大部分の人が苦しんでいるのに、たったひとりで飲むこと、あるいはこの御国のために働いた、二、三の友人たちとだけ飲むことはね。そうではなくて、彼は皆と共に、貧しい者のうちの最も貧しい者とだって共に飲みたいと思われたんだ。だから天国では、キリストは僕たちと一緒に飲むだろうな。天国になら、ぶどう酒はあり余るほどあるだろうし、ぶどう酒だけでなくね。なぜなら、天国には何か他の飲物を飲んでいる国々だってある

んだらうから、ビールやラム酒やチチャ酒やとうきびのブランデー、あるいはクササ酒があるだろう。それらは僕たちの所にだってあるんだから、天国にない飲物なんてないだろうな。

パブロ 彼の弟子たちが、洗礼者ヨハネの弟子たちのように断食をしなかったということ覚えてる？ なぜなら、イエスの弟子たちは、イエスが花婿である祝祭を祝っていたんだからね。だが、イエスの死の後には、彼らは断食をしたんだらうか？ これは、今日、僕たちが断食をせず、金持ちのように楽しんでも構わないということの意味しているんだ。なぜなら、キリストは今でも、貧しい人々の中で十字架に架けられているんだから。お祭りが悪いことで、断食がよいことなどというのではなく、それは貧しい人々との連帯感から出ていることなんだ。

オルギュータの男ホセ・アランス。——ぶどう酒も、楽しみも、イエスが主の祈りでパンを引いて示したように、すべての人間のために願わなければならないんだ。パンとぶどう酒は、両方とも同じくらい大切なものなんだ。パンは日々の糧、ぶどう酒は喜びなんだ。だからイエスは奇蹟のひとつをパンで、もうひとつをぶどう酒で行われたんだ。なぜなら、どんな祭りも祝うことができない貧乏人たちが居るからなんだ。彼らは恐らく酔っぱらうことはあるだろうが、喜びをもって酔っぱらっているのではないんだ。神の御国における喜びは、すべての人間たちが愛し合い、互いによき友人になって初めてやって来るものなんだ。

ウィリアムの妻テレシータ。——でも、イエスさまがこの奇蹟を起こされたのは、何かのお祭りではなくて、結婚式なのよ。

オルギュータの男。——結婚式だったというのは、イエスが愛をもたらしたということを意味しているんだ。

私は言った。——救世主^{ノセツ}の時代には、結婚式はしばしば、神によって告知されるんだね。イザヤはイスラエルの民に告知している。「ひとりの若者が乙女と結婚するように、汝も創造主と結べ、花婿がその花嫁を喜ぶように、汝の神も汝を喜ぶであらう」。愛の雅歌においても、結婚が話題になっている。そこでは、花嫁は花婿に口づけを求めて、花婿の優しさが、ぶどう酒よりも好ましいと言っている。すると花婿が答えて、花嫁の眸は二羽の鳩のようであり、その胸は百合の下に草をはむガゼルのようなという。花嫁は歌の時が来たこと、雨が和らいだこと、ぶどうの園が香りに満ちていることを保証する。それに答えて、花婿は、彼女の愛がぶどう酒よりも好ましく、それは彼らの舌の下を乳と蜜のように流れ、彼らの肢体は、周囲に百合の花を挿した麦の束の束のようだという。すると花嫁は、彼女の愛する人が彼女のものであると答えているんだね。イエスはここで私たちに、イエスとのこのような婚礼の日が来たことを、私たちに示したかったのだ。洗礼者ヨハネはイエスを救世主^{ノセツ}、花婿と呼んでいる。そしてまた、イエスご自身も、弟子たちに、私は花婿なのだから、断食をしてはいけないと言っている。(イエスは幾つかの比喩で) 天の御国について、イエスが花婿である婚礼、あるいは婚宴のように語っておいになる。

フェリペ そこにはもう孤独な、あるいは挫折した人々はいないんですね？ 愛というのはすべての人に対するもの、絶対的にすべての人間に対するものなんですね。この婚礼からは、誰も除外され

るものがない。これが真実の社会的な公平なんだろう。

ホセ・アラニッツ　そうだ、それは本当だ。人間はただ、パンやぶどう酒や、よい収穫だけが必要としてゐるんじゃない。人間は、愛をも必要としてゐるんだ。この愛への飢えを、イエスは鎮めることができるに違いない。

私は言った。——そうだね。誰もがこの口づけから除外されているわけではない。愛の雅歌のぶどう酒からも。

オリーヴィア　私たちは皆、男も女も、老人も子供たちも乳呑み児さえも、皆、私たちは一体なのよ。神の愛される花嫁、人類なのよ。

ラウレアーノ　もっとよく言えば、僕たちは一体になるために闘っているんだ。この闘いが革命なんだ。

カルロス・アルベルト　神は愛なんだ。人類は愛との結婚を祝うことになるだろう。

宴会係の長は花婿を呼び、彼に言った。「誰もが、先によいぶどう酒を出して、お客たちが十分に飲むと、初めて下等なものを出すのに。しかし、あなたは、よいぶどう酒を最後まで残しておいたのですね」。

アンジェル・マイヨルガ　当たり前だね。最初は、「カーニャの花」なんていうラム酒か、あるい

はウィクトリア・ビールが出される。そしてすべての人々が席につくと、クッサ酒が取り出されるんだ（皆、笑う）。

オリヴィア この世の喜びごとは、最初は素晴らしいわ。だけどその後で、それは幻滅に変わるのよね。神の喜びごとは、まったく逆なんだわ。

マルセリーノ 神が人間のために用意した同胞愛の喜びは、偉大な祭りなんだ。しかしこの祭りの最良のぶどう酒は、私たちが最後に飲み干すもの、つまり、永遠の生命なんだね。